

茨木・勝光寺阿弥陀如来立像について

桑野 梓

1. はじめに

茨木市水尾に所在する西河山勝光寺は浄土真宗本願寺派の寺院である。もとは行基開基と伝わり、真言宗の大寺院であったと伝わる西方浄土寺の奥ノ院を前身とする。西方浄土寺は明徳年間（1390年～1394年）に高野山との裁定に敗れ衰微し、また応仁の乱によって大半が焼かれ、さらには信長の焼き討ちに遭い、壊滅したという。その後永享年間（1429年～1441年）に俊恵により再興され、明覚によって浄土真宗寺院に改宗された。明治時代以降、一時期は無住の時代もあったというが、今日までその法灯を守り伝えている。

ここで取り上げる阿弥陀如来立像は、勝光寺本尊として安置される。勝光寺には、慶長10年（1605年）に西本願寺から本尊を下付されたとの記録（『木仏之留』）がある。しかし本像は一見して鎌倉時代の作とみられ、江戸時代に新たに造像されたとは考えにくい。

本像については、既に『新修茨木市史』で紹介されている（註1）。今回、本像を調査する機会を得たため（註2）、先行研究に導かれながら、詳細を示して紹介するとともに、作風についても若干の考察を加えたい。またそこから作者についても検討を加えたい。

2. 像の概要

阿弥陀如来立像は像高78.8センチメートル、髪際高73.1センチメートルをはかる。まずは形状から述べる（註3）【図1～8】。

〔形状〕

螺髪を彫出する。各旋毛形を刻む。地髪部をふくらませ、髪際線を正面で下げてうねらせる。肉髻珠、白毫相をあらわす。口髭、顎髭を墨書する。耳朶は環状貫通とし、耳孔を穿つ。三道を彫出する。

着衣は、内衣、覆肩衣、大衣、裙を着ける。内衣は左胸から右腹前にかけて斜めにあらわし、その上縁を折り返す。覆肩衣は右袖を形成し、右胸下で大衣にたくし込んでたるませ、さらにその右

端を折りかえす。大衣は右肩に少しかかって右腋下を通り、正面にまわる。上縁を折り返し、端は左肩から左腕にかけて背面にまわす。大衣の1巡目を左胸から左腹部分で2巡目の上縁の上に引出し、たるませる。裙は右脛前で右を前にしてうち合わせる。

右手は屈臂し、掌を正面に向けて第1指、第2指を捻じ、左手は垂下し掌を正面に向けて第1指、第2指を捻じていわゆる来迎印を結ぶ。左足をやや前に出し、蓮華座上に立つ。

〔品質構造〕

次に品質構造について述べる。阿弥陀如来立像は一木割矧ぎ造で、玉眼を嵌入する。頭体幹部は頭部では耳後ろ、像底では右足中央付近と左足踵を通る線で前後に割矧ぐ。内削りを施し、三道下で割首としていると思われる。両肩以下を別材とする。右肩以下は、右肩から上膊上半を含む1材を肩に少しかかる大衣の線で矧ぐ。外袖に1材、外袖口に1材を矧ぐ。内袖に1材を矧ぐ。袖の中に右前膊から右手首までの材を矧ぐ。左肩以下は、前膊から外袖を含んだ1材を矧ぎ、内袖に前後2材を矧ぐ。大衣の1巡目と手首から先を差し込み矧ぎとする。両足先別材製。足柄は幹部材より彫成する。像底は浅く彫りくぼめる。

表面は、錆下地に漆箔を施す。頭髮は群青、髪際に緑青をひく。

〔保存状況〕

後頭部上方に縦長の埋木、その下方に小孔が穿たれている（当初の光背の取り付け箇所か）。左手第三指先、両足先を後補とする。表面仕上げも後補である。また、台座、光背も後補である。左手第四指先、右手第三指先を欠損する。足柄後方を欠失している。なお、玉眼の水晶部が両端ともに下方にずれている。

3. 作風と作者について

本像は先にも述べたように、顔の表情や引き締まった体躯の表現、頭体のバランスのよさ、翻る

ような衣文線の表現などから、鎌倉時代の作であることがわかる。以下では詳細についてみていきたい。

頭部の表現についてみると【図9～12】、大きめの螺髪を刻み、後頭部ではゆるやかな逆V字に配列する。また、正面では髪際線をうねらせている。面貌表現は、眉をなだらかな曲線で描き、細く切れ長の眼を配している。張りのある頬は、縦に長くあらわされている。体軀についてみると、肩はなで肩とし、背中を猫背気味に丸くあらわしている。太ももの張りの表現は、1歩踏み出した左足と体の動きは連動せず、動きは全体的に少ない。また側面からみた体軀の量感も、腹部を強調せず全体にすっきりとした印象をもつ。その一方で、胸部から腹部にかけての衣文線は動きがあり、複雑に表現されている【図13】。例えば左胸から右胸下にあらわれる内衣は折り返しをつくり、皺も表現されている。また大衣の折り返した上縁の端は左脇下でΩ字型に折りたたみをつくり【図14】、右胸下でたくし込んでたるませた覆肩衣も、折りたたみや皺を多く刻んでいる【図15】。これらの衣文線や皺は煩雑ながらも写実的で自然な流れを生み出している。

ところで、江戸時代の浄土真宗本願寺派（西本願寺）においては、本山から本尊である阿弥陀如来像の木仏を下付されるシステムが採用され、17世紀後半にはそのシステムがほぼ整ったと考えられている。本山より下付される阿弥陀如来像は、鎌倉時代の仏師快慶の作り出した安阿弥陀様と呼ばれる形式の新造の仏像であった。一方で、新造の安阿弥陀様の仏像に限らず、有縁の古仏を本尊として迎える場合もあったため、勝光寺像のような鎌倉時代作の阿弥陀如来像が現存することもあった。では勝光寺像は安阿弥陀様の形式を採用している像なのだろうか。

安阿弥陀様については、山本勉氏によって襟の線の形式の変化から大きく3形式に分類されているが（山本1986）、勝光寺像の襟はより複雑さを増し、皺や折り返しを多用することで装飾性を高めている。また山本氏はこれらの安阿弥陀様とは異なる形式を組み合わせた定型が、快慶の最晩年ころには成立したことを指摘されており、その中で運慶作品を原型とした「運慶様」の存在も示唆されている（山本2017）。勝光寺像が「運慶様」の形

式を採用したかは不明であるが、少なくとも安阿弥陀様を意識した上での別形式の採用、といえるのではないだろうか。

では作者は誰を想定できるだろうか。勝光寺像の大きめの螺髪やうねる髪際線などの頭髪表現は、いわゆる「宋風」を採用していると考えられ、これは南北朝時代の「唐様」を採用した院派につながっていく可能性がある。また、頬が縦に長く、やや下膨れの顔は、延慶3年（1310年）花洛院保作の山形・慈恩寺薬師三尊像の面貌表現に通じ、さらには南北朝時代の院派仏師の作風と共通する。体軀の表現は、南北朝時代の院派仏師の坐像の作品に共通する、猫背気味の背中が勝光寺像と共通するといえるが、一方で寸のつまったような体軀の表現に繋がっていくようには思えない。

鎌倉時代の数少ない院派仏師の制作時期の判明する作例のうち、例えば天福元年（1233年）院範、院雲作の京都・宝積寺十一面観音菩薩立像（水野編2007）、文永5年（1268年）院好作の山口・二尊院阿弥陀如来立像、永仁3年（1295年）院玄作の熊本・青蓮寺阿弥陀三尊像のうち阿弥陀如来立像、元徳2年（1330年）院芸作の滋賀・聖衆来迎寺地藏菩薩立像などの立像については、南北朝時代の院派仏師の作品にみられるような寸のつまった体軀の表現はみられず、勝光寺像のすっきりとした体軀の量感と共通することがわかる（横浜歴史博物館1995）。

他に、寺島典人氏によって鎌倉時代の院派仏師の作とされている滋賀・妙盛寺阿弥陀如来立像や京都・大超寺阿弥陀如来立像などと比べても、面貌表現や装飾性の高い衣文線などが共通している（大津市歴史博物館2012）。

以上の検討から勝光寺像の作者は院派仏師を想定することができよう。勝光寺像の制作時期は、作風や安阿弥陀様を意識した上での別形式の採用などをみると、快慶没後、次世代の活躍によって阿弥陀如来像の形式がある程度定型化した、13世紀半ばころから後半にかけてと考えられる。

4. おわりに

勝光寺阿弥陀如来立像は、今はなき西方浄土寺奥の院の本尊であったという伝承をもち、幾多の困難を乗り越えて、今日まで守り伝えられてきた。本稿では勝光寺像の作者が院派仏師である可能性

を指摘したが、鎌倉時代における安阿弥様以外の阿弥陀如来像の広がりと展開を考える上で、また地域の歴史を考える上でも大変貴重な像であるといえる。

註

1) 『新修茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸』茨木市史編さん委員会、平成20年(2008年)2月。

2) 調査は平成29年(2017年)2月14日に行った。調査参加者は中東正之(元茨木市立文化財資料館非常勤嘱託員)、桑野である。勝光寺像の写真は、中東氏撮影によるものを使用した。

3) 法量(単位:センチメートル)

像高	78.8	髪際高	73.1
頂一顎	13.6	面幅	8.1
面長	8.1		
耳張	10.7	面奥	11.7
胸奥(左)	11.2	(右)	11.2
腹奥	12.7	肘張	23.6
裾張	17.1		
足先開(外)	13.4	(内)	7.1
台座高	47.6	(蓮肉上まで)	46.2
光背高	93.1		

足柄

(右) 幅(前) 2.0

(後) 1.2 (後半欠失のため、現状穴部分)

奥(右) 3.2 (左) 3.6

高 3.5

(左) 幅(前) 1.7

(後) 1.2

奥(右) 4.3 (左) 4.5

高 3.5

参考文献(五十音順)

大津市歴史博物館 2012 『阿弥陀さま—極楽浄土への誓い—』

水野敬三郎編 2007 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代』 5 中央公論美術出版

山本勉 1986 「安阿弥様阿弥陀如来立像の展開—着衣形式を中心に—」 『仏教芸術』 167 pp. 64-79

山本勉 2017 「安阿弥様の成立と展開」 『快慶 日本人を魅了した仏のかたち』 奈良国立博物館 pp. 207-209

横浜市歴史博物館 1995 『中世の世界に誘う 仏像 院

派仏師の系譜と造像』

謝辞

調査にあたっては、勝光寺住職の高丘寿師に多大なるご協力ご高配を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。